

『アルヴァイナの墮落』論

——「墮落」の意味（2）——

山田晶子

前号掲載分の要約：『アルヴァイナの墮落』(The Lost Girl) という題名における「墮落」(“Lost”に相当する)の意味について考察するのが本論の主題である。前号掲載分においては、「序」において、「墮落」の意味には5つの重層的な意味が込められていることを述べ、「Ⅰアルヴァイナの父親の墮落の意味」「Ⅱアルヴァイナの『墮落』の始まり」「Ⅲアルヴァイナの迷い」の3章において、「墮落」の意味を考察した。アルヴァイナの「墮落」を作者D. H. Lawrenceは真の墮落と考えているのではなく、むしろ彼女が「墮落」することこそ、彼女の再生のためには必要なことである、と考えていることを論じた。今号では、アルヴァイナの更なる「墮落」の深化を論じる。

Ⅳ ナッチャ・キイ・タワラ座

エンデヴァア座がある程度成功をするようになり、アルヴァイナが大勢の芸人と接するようになると、彼女はレイディの基準から外れた女性になった。彼女は映画や芸のもたらす生活を楽しんだ。そして自分が上流階級出身者だということを忘れてしまったが、気にならなくなっていた。ここで彼女は「階級を外れた」(She was declassée: she had lost her class altogether.:117)¹⁾と書かれているが、このことはまさしく、彼女の「墮落」を意味している。しかしこの「墮落」を作者は賞賛している

のである。というのも彼女はエンデヴァア座を介して生涯の恋人であるチッチョと出会うことができたからである。彼は次のように描写されている。

The long black lashes lay motionless, the rather long, fine Greek nose drew the same light breaths, the mouth remained shut. Strange fine black hair, he had, close as fur, animal, and naked, frail-seeming, tawny hands. (LG129)

長い黒い睫はじっと動かず、かなり長めのギリシア的な綺麗な鼻は、同じく軽い寝息を立てて、口は閉じられたままであった。毛皮のようにびっしりと生えた動物的な髪を彼は持っていた。そして黄色い手は無防備ではかなく見えた。²⁾

この引用から分かるのは、ロレンスが他の小説でも描いている主人公となる男性の動物性であり黒さである。そして彼の独特の美しさである。彼の「黒い睫」は彼の黒さを表し、「ギリシア的な鼻」は、彼がイタリアのナポリ出身ということと合わせると古代のギリシア・ローマ神話の異教の世界を連想させる。そして「毛皮のようにびっしりと生えた動物的な髪」は、動物のような本能の力をなくしていない男性を感じさせる。チッチョは、イタリアのナポリ出身である。彼は、ナッチャ・キイ・タワラ座の一員であるが、この一座はアメリカインディアン名キシューガンの女性を座長に持っている。他の座員3人の男性もインディアンの血を引いている。アメリカ・インディアンはヨーロッパから移住してきた白人に虐げられた黒い人種である。ゆえにこの座は非キリスト教的な芸人からなる一座なのである。この一座の一員であるマックスがヨーデルを吹くことになるが、その説明にはこの一座の特徴が表われている。ヨーデルとは、氷のようにつめたい野生の神が囁っているかのようで、言葉がなく意味がない響きであり、非人間的なもの(134)である。「非

人間的」という言葉には、物質文明が流入する以前の、自然世界と人間世界が一体化していた先史時代の意味が表われている。その頃、人間はまだ慣習などの「人間的」な不純物を身につけていなかったという意味と思われる。つまりロレンスは「非人間的」という言葉に肯定的な意味を込めていると思われる。ナッチャ・キイ・タワラ座は放浪しながら芸を上演してお金を稼いでいる人々である。ゆえに既成の社会習慣から外れて生きている人々なのである。

この一座がウッドハウスに到着したとき、マダム・キシューイーガンが風邪を引いてアルヴァイナの世話になったために、アルヴァイナとチッチョは少し親しくなる。彼は馬と結び付けられている。彼は文明の発達・進歩というものに批判的であることが、イギリスでは馬が真に生きていなくて鉄道のエンジンが生きている (140)、という彼の言葉からうかがえるし、この思いは作者ロレンスのものであることが分かる。ここで言及されている「馬」は、『恋する女たち』の第14章の「炭塵」(“Coal Dust”) という章の、汽車におびえる馬の描写を思い出させる。そこでは無機的な機械が有機的な生命を脅かす場面が迫真的に描かれている。³⁾ そしてアルヴァイナとチッチョの間には自然な交感が生じる。チッチョの目はアルヴァイナには、非常に「黒く」(dark:140) 見える。ここからチッチョは、ロレンスの他の小説に登場する黒い男性、女性にその真の自己を悟らせる男性として登場していることが分かる。彼の瞳は彼女の通常の自己(表面的な自己)を通り越して彼女が意識していない自己を見ているようであった (140)。彼の目は美しく謎めいて神秘的であった。チッチョが「神秘的」であるという表現は、『羽鱗の蛇』(The Plumed Serpent) におけるドン・ラモンやドン・シプリアーノというインディアンに神秘性と関連するものであろう。⁴⁾ 『羽鱗の蛇』に登場するケイトという女主人公は、これら二人のインディアンの男性の神秘性に惹かれ、最後にはドン・シプリアーノと結婚する。『アルヴァイ

ナの墮落』においても神秘性を感じさせるチッチョは、アルヴァイナにとって非常に魅力的な存在となっていることが分かる。しかし、平凡な女性であるミス・ピネガーには、ナッチャ・キイ・タワラ座はこっけいな存在にしか思われず、彼女がそのようなコメントを言うとアルヴァイナは激怒する。アルヴァイナの、一座に対する真剣さはミス・ピネガーにとっては「気が狂っている」(143)と言わしめるほどであった。“Lost”には「気が狂った」という意味もあるので、ここにも“Lost”のもう一つの意味があると考えられる。

マダムが風邪を引いてアルヴァイナに看病をしてもらっている間に、マダムの話からナッチャ・キイ・タワラ座の特徴が分かってくる。それは反キリスト教的な一座である。彼女は「頭」と「心」の作用の違いをアルヴァイナに説明する。それは、マダムにとって心の方がより大事であるということである。イギリス女性は親切であるが頭で親切であり、心で親切ではないと言う。しかしアルヴァイナだけは例外であると言う。また彼女は、ウッドハウスはアルヴァイナに相応しい環境ではないと言う。ここで「頭」とは論理的・精神的なものに偏った世界を意味しており、「心」とは本能的・直覚的な世界を意味していると思われる。マダムの言葉はロレンスを代弁しており、彼は後者の世界をもっと重要視するべきであると考えていると思われる。

彼女は風邪が治ってからエンデヴァアハウスの舞台上で踊るが、その踊りは文明以前の雰囲気を漂わせているものであった。

It was a lovely sight, suggesting the world's morning, before Eve had bitten any white-fleshed apple, whilst she was still dusky, dark-eyed, and still. And then her stealthy sympathy with the white prisoner!
Now indeed she was the dusky Eve tempted into knowledge. (LG161)

それは、イブがまだ白い林檎の肉を齧る前の、世界の朝を

暗示する見事な光景であった。一方彼女はまだ黒っぽく黒い目をしており静かであった。それから白い囚人への彼女のひそかな同情！今や彼女は白い知識へ誘惑される黒っぽいイブであった。

マダムは知恵の木の実である林檎を食べる以前の黒っぽいイブのようである、と表現されているので、キリスト教文明に侵される以前の姿を呈示していると言える。そして白い囚人に惹かれる彼女は、キリスト教文明に毒される運命と言える。マダムは、現実ではキリスト教社会の中で興行をして金を稼いでいるのだが、そのような自分を頭では実際的であるが心は実際的でない、と言っている。つまり、生きるための方策としてキリスト教社会のしきたりを感じなければならないのだが、心は真にキリスト教社会に毒されてはいないのだ、と言いたいのだと思われる。彼女は髪と目が黒いのであるが、心も「黒い」ことの重要性を語っている。それは、黒い瞳の種族を賞賛していることから分かる。マダムは、チッチョは黄色い目であるが、黄色い目こそ最も黒いと語る。チッチョはイタリアという南方の出身であるので、彼の目と黄色さが結び付けられているのであろう。つまり黄色は原始の太陽の色を表していると思われる。そしてアルヴァイナにとって、チッチョは黒っぽい魅力を備え、彼女を惹きつける。チッチョは動物的な存在として描かれているのであるが、その黄色っぽさはライオンのように喩えられている。

His skin was delicately tawny, and slightly lustrous. The eyes were set in so dark, that one expected them to be black and flashing. And then one met the yellow pupils, sulphureous and remote. It was like meeting a lion. His long, fine nose, his rather long, rounded chin and curling lips seemed refined through ages of forgotten culture. (LG160)

彼の肌は肌理の細かな小麦色で、微かに輝いていた。目はとても濃い色だったので、黒い色で輝いていると思われたであろう。しかしおう色で不思議な黄色い瞳があった。それはライオンに出会うのに似ていた。彼の長い美しい鼻とかなり長い丸いあごと巻き上がった唇は、忘れられた遠い文化を経て洗練されているように思われた。

「光沢がある」という表現には動物の「毛」のイメージと温かさが感じられ、「ライオン」と繋がる。ライオンは暖かい地方に生きる動物だからである。また「黒っぽくひらめく」という表現にも、南方と光のイメージが表われている。更に「長い間に亘って忘れられた文化」という表現からは、キリスト教文明が登場する以前の文明の存在を感じさせる。かくして、チッチョという男性は、キリスト教文明以前の要素を備えた男性であり、アルヴァイナという主人公が彼に惹かれ、結婚することは、作者ロレンスがキリスト教文明以前の文明に深く惹きつけられていることを表わしていると言えよう。

V アルヴァイナとチッチョの結婚

ナッチャ・キイ・タワラ座がウッドハウスから去り、アルヴァイナは寂しさを覚えていたが、この間に父親ジェームズが病気で亡くなる。マダムとチッチョが葬式に出席し、アルヴァイナは葬式が終わった後、タワラ座を追っかけてチェシャーへ行き、マダムにタワラ座の一員になりたいことを伝え、ピアノ弾きとして加わった。彼女の名前はアレイエに変わる。そして何よりも彼女はチッチョと結ばれたく、マダムは二人の愛を認めたので、二人は宿屋で私的な結婚式を挙げる。アルヴァイナがアレイエになる、つまりナッチャ・キイ・タワラ座の一員になる儀式に

において、一座が燕の一族であると宣言される。燕は黒く、また渡り鳥である。ゆえに一座が放浪者である性質を持っていることを表わしている。

初夜では、アルヴァイナはチッチョの「闇」の美しさに圧倒され、彼を受け入れたのであった。彼は下層階級の出身者であり貧しい25歳の若者である。上流階級出身のアルヴァイナが彼に喜んで身を捧げたことは、「墮落」を意味するが、作者はこの墮落こそを賞賛している。アルヴァイナは、マダムが二人の結婚を心配し「あなたは下へ下がるのよ」と言うとき、なぜ人はいつも上昇しなければならないのか、下降してもいいじゃないのか、とと思っている。つまり、「下降」の意識こそがロレンスが必要と考えていることと言える。『羽鱗の蛇』でも、メキシコの古代の神であるケツアルコアトルは大地の中心にいる炎である蛇と大空を飛ぶ鳥を併せ持つ神として表現されている。つまりケツアルコアトルは空と大地の二道を目指す神なのである。そして『アルヴァイナの墮落』でも、下降への意識の主題は大きく存在している。それは、彼女の母親やミス・フロストや父親ジェイムズが血と肉に反した上のみを目指す人生を送ったのに対立する生き方を意味している。チッチョの正式な名前は「フランセスコ・マラスカ」であり、「マラスカ」は「生命力を下げる」という意味であるとマダムは言っているが、アルヴァイナは気に掛けない。「マラスカ」というのは「苦いチェリー」という意味である。また「毒の入ったワイン」であるとアルヴァイナは思う。しかしこの「毒」こそが彼女が生まれ変わるために必要なものである。また、アルヴァイナの口から、チッチョは一座の中でも一番黒い男であると述べられている。ここにもチッチョの「黒い男性」性が強調されている。アルヴァイナは、チッチョへの憧れを消すことが出来ない。彼女とチッチョの接触の描写を見よう。

Her eyes were wide and neutral and submissive, with a new,

awful submission as if she had lost her soul. (LG175)

彼女の目は大きく感情がなく、受動的で魂をなくしてしまったかのような、新たな威厳のある受動性を備えていた。

アルヴァイナは、誇り高い女性であり非凡な女性である。その彼女が進んで身を捧げ、膝まづいたのはチッチョへの果てしない憧れのせいであった。彼の神秘的で謎を秘めた存在、美しい野生の獣のような存在のためであった。ロレンスの長篇小説で、女性が自ら進んで男性に身を捧げるのはアルヴァイナが最初であると思われる。そしてこの女性の受動性は、再び『羽鱗の蛇』において深く追求されている。⁵⁾

She could conceive now her marriage with Cipriano: the supreme passivity, like the earth below the twilight, consummate in living lifelessness, the sheer solid mystery of passivity. Ah, what an abandon, what an abandon, what an abandon! (PS 311)

彼女は今やシブリアーノとの結婚の可能性を肯定できた。黄昏に包まれた大地のような完璧な受動性、生きながらの死の状態で完全な実体のある受動性の神秘を得て自分を燃やすこと。ああ、なんという放擲、なんという放擲、なんという放擲なのだろう！

『羽鱗の蛇』では、主人公であるアイルランド人のケイトは、ヨーロッパでの生活に倦んでメキシコへ来たが、なおも再生の可能性を感じられずに悶々としていたときに、インディアンのドン・ラモン将軍とドン・シブリアーノ将軍に出会い、彼らの唱導する異教の神であるケツァルコアトルの信仰に惹かれることによってドン・シブリアーノと結婚をして再生を果たしてゆくのである。この場合、二人の性愛においてケイ

トはドン・シブリアーノと究極の女と男の結びつきを果たすことによって、救われるのであり、それはロレンスが何度も書いている男根的神秘を味わう結婚なのである。

『アルヴァイナの墮落』における男性の圧倒的な優位性の主題は、ロレンスの小説における主題の転換期を示していると思われる。マイケル・ベルもこの点に関して述べている。⁶⁾そして彼女が「魂を失ったかのように」という表現に「墮落」の重要な意味が込められている。アルヴァイナとチッチョの結合を作者は賞賛しているのである。

She moaned in spirit, in his arms, felt herself dead, dead. And he kissed her with a finesse, a passionate finesse which seemed like coals of fire on her head. (LG175)

彼女の魂は、彼の腕の中で呻き死んだように感じた。そして彼は燃える石炭のような情熱的なやり方でかの女にキスをした。

この引用では、「燃える石炭」という言葉に注意したい。『息子と恋人』(Sons and Lovers)で、ポールがミリアムに、松の木の内部の目に見えない燃える火に注意をしておらん、と言ったが⁷⁾ミリアムは気がつかなかった。しかしアルヴァイナは、まさしく「燃える火」を身を以って体験したのである。そして「燃える石炭」は、また大地の内部の火であり、下降への意識を表している。これは、女性にとっての最高の男性の力という恵みなのである。チッチョは「火は美しいね」と言うが、『羽鱗の蛇』においても「火」の主題は異教の太陽と結びついて重要な主題になっている。またチッチョと火の結びつきは、『チャタレー卿夫人の恋人』と同じくらい明瞭に書かれている。

She locked the door and kneeled down on the floor, bowing down her head to her knees in a paroxysm on the floor. In a paroxysm---because she loved him. She doubled herself up in a paroxysm on her knees on the floor---because she loved him. It was more like pain, like agony, than joy. She swayed herself to and fro in a paroxysm of unbearable sensation, because she loved him. (LG175)

彼女はドアに鍵を掛け、床に跪き発作状態で頭を膝につけていた。発作状態——なぜなら彼女は彼を愛していたからである。それは歎びよりも苦痛、苦悩にずっと似ていた。彼女は耐えられない感情の発作状態で体を前と後に揺すった。なぜなら彼女は彼を愛していたからである。

床に膝まづくアルヴァイナは、愛する男性のためには屈辱を感じはしない。「発作」状態に駆られて体を揺する彼女は、レイディという古い自己を脱ぎ捨てていると言えるであろう。

ジェームズが死んで、アルヴァイナはマンチェスター館の整理のためにウッドハウスへ戻らなければならなかった。チッチョも一緒に出かけた。ジェームスには借金があったので、エンデヴァアハウスを畳んで財務整理を終えた後、彼女には一銭も残っていなかった。彼女にはチッチョしかいなかったのである。ミス・ピネガーは、アルヴァイナがタワラ座と一緒に興行をして回る生活をするという決意を聞いて、「あなたは道を外れた」(You're a lost girl:217)と言い、またメイ氏は「それは売春行為だ」と言う。ここにも、アルヴァイナの「墮落」の大きな意味があると見えよう。彼女は、レイディから「外れた」のであるし、誇張した言い方では「売春行為」なのである。しかしここでも作者はアルヴァイナの「流れ者」としての生き方を賞賛しているのである。彼女は「私は道を外れたい」(I like being lost:217)と言っている。

一方、チッチョは「太陽の暖かさの、黒い底知れない何か」(211)を備えており、「炎」を持っているのである。そして彼の動物性は「獣の手」(212)という表現でも表わされており、アルヴァイナは、それが自分を撫でるように感じる。彼女は子供の頃、ミス・フロストと一緒にときは嘲るような冷笑的な皮肉な笑いをしていたが、今やおおびらに笑う。それは自然な笑いなのである。『虹』においてアナが笑った嘲笑とも異なっている。自然な笑いこそロレンスが賞賛するものである。この笑いには性的な意味が込められており*The First Lady Chatterley*においてコニーについて「笑う肉体」という表現があるように、性愛を十分に満喫している女性を意味している。アルヴァイナとチッチョの間には「肉体的な理解」(214)が存在し、それは「とても温かくて健全な」(214)ものなのである。彼女が意識の上で彼の平凡さに反発しているとしても、彼の謎めいた神秘性はそれを超えて魅力があり、彼女の本性はそれに抗うことが出来ないのである。彼女がレイディとして「サラブレッド」(243)であるとしても、彼も「スフィンクス」(243)であり「サラブレッド」(243)である。彼女には葛藤があるが、しかし最終的には、チッチョの力が彼女の力よりも強いのである。

アルヴァイナがタワラ座の一員となって巡業するようになってすぐに、探偵が一座を探っていることが分かった。それは一座を売春奴隷商売と疑っているためであった。アルヴァイナは、自分があることが一座に迷惑をかけていると感じ、一座から離れる決心をする。そしてランカスター教区で助産婦をして生計を稼ぐことになる。

彼女が勤務している病院で、彼女はミッチェル医師と出会うが、彼は彼女にプロポーズをする。彼は名士であり裕福であるが、アルヴァイナには彼の尊大さ、キリスト教国における成功の代名詞のような彼になぜか不満を覚える。それはミス・フロストが持っていたと同じの自分中心主義の考え方のせいであった。自分のやり方が正義であると考えて他人

にも押し付ける傲慢さのためであった。そしてアルヴァイナはタワラ座やチッチョのことを思うのである。

一方、チッチョは、マダムや他の座員がヨーロッパへ去ってしまったあとイギリスに一人残され、アルヴァイナを焦がれて彼女の居所を探し当てる。彼は彼女に「結婚してイタリアへ一緒に来てほしい」と熱心に頼み、彼女は彼の不思議な美しさゆえに結婚するのである。彼は町を歩いているときには、他人の目に平凡な男に映るのであるが、アルヴァイナは彼の美しさを理解する。彼は何度も動物性と黒さが強調されて描写される。この動物性が彼女を惹きつけるのである。彼の南方の黒い特質は、彼女自身の特質と非常に異なっていて、それが彼女を惹きつけたのである。

He was very happy, and his face had a real beauty. His eyes glowed with lustrous secrecy, like the eyes of some victorious, happy wild creature seen remote under bush. And he was very good to her. His tenderness made her quiver into a swoon of complete self-forgetfulness, as if the flood-gates of her depths opened. The depth of his warm, mindless, enveloping love was immeasurable. She felt she could sink forever into his warm, pulsating embrace. (LG290)

彼は非常に幸福で、顔は本物の美しさを湛えていた。目は、藪の中において遠くから見られている勝利感に浸る幸福な野生動物のように、光沢を帯びた秘密を抱いて輝いていた。彼女には非常に優しくした。彼女の深部の水門が開いたかのよう、彼の優しさは彼女を震えさせて完全な自己忘却へと失神させた。彼女は永遠に彼の温かな脈打つ抱擁に沈むことが出来ると感じた。

「優しさ」は、『チャタレー卿夫人の恋人』では男性主人公メラーズの特徴としてたびたび描かれているが、『アルヴァイナの墮落』においてもすでに描かれているのである。この優しさは、「理知的」ではないのであり、「動物的」なものである。つまり「本能的」という特徴がある。「単一的」なイギリスの生活では得られない南方的なものである。「単一性」はキリスト教の特徴であるが、それよりも南方の多様性を持つ異教性が重視されているのである。

結 論

アルヴァイナとチッチョは、彼の故郷であるイタリアのカリファーノへ向かって旅に出る。そこはナポリから更にバスに乗ってゆき、終点で降りてからも歩いて1マイルも行かなければならない山奥である。しかしアルヴァイナは、船でドーヴァー海峡を渡ったとき、イギリスが灰色の長い棺のように見え、海に沈んで行くように見えた。彼女は故郷を離れることに少しも悲しさや寂しさを感じていない。

カリファーノへ到着してからは、そこの異教的な自然の美に圧倒され、チッチョと一緒にいる限りは幸せを感じている。もしチッチョがいなかったならば彼女には耐えられない場所なのであるが。チッチョの美については次のように述べられている。

She looked tender and beautiful in her still vagueness, and Ciccio, hovering about her, was beautiful too, his estrangement gave him a certain wistful nobility which for the moment put him beyond all class inferiority. The passengers glanced at them across the magic of estrangement. (LG293)

彼女は静かな忘我状態にあって優しく美しく見えた。チッ

チヨは彼女を包みこんでいてまた美しく、その特異性は、一瞬全ての階級的な劣等性を越える、何かを思い焦がれるような気品を彼に与えていた。乗客は、特異性という魔法を一瞬破って、二人を一瞥した。

チッチョの類稀な非凡性に気がつくことができたのは、アルヴァイナであるからこそであった。彼の圧倒的な美は全ての他の人々の基準である善を凌ぐものがある。そしてこのような美に気がついて結ばれることこそ、どの人間にとっても本望であるはずである。結ばれた二人には絶対的な絆ができるであろう。しかし、平凡な人間は、社会的地位や金があるかどうかまたは学歴等によって結婚相手を決める。その結果二人を結び付けている絶対的な絆はなく、結婚後に長い倦怠の日々を過ごすことになるのである。ロレンスにとってはこのような倦怠は耐えられなかったのであろう。

カリファーノへ到着したアルヴァイナについては「疑いはなかった。アルヴァイナは消えた女であった」と書かれている。ここに「墮落」を表わすもう一つの意味が読み取れる。「消えた」ことは常識的な価値基準からは「落ちこぼれた」という意味を表わすからである。しかしアルヴァイナは、カリファーノの美しさに囲まれていることに幸せを感じて止まない。

Nothing could have been more marvelous than the winter twilight. Sometimes Alvina and Pancrazio were late returning with the ass. And then gingerly the ass would step down the steep banks, already beginning to freeze when the sun went down. And again and again he would balk the stream, while a violet-blue dusk descended on the white, wide streambed, and the scrub and lower hills became dark, and in heaven, oh,

almost unbearably lovely, the snow of the near mountains was burning rose, against the dark-blue heavens. How unspeakably lovely it was, no one could ever tell, the grand, pagan twilight of the valleys, savage, cold, with a sense of ancient gods who knew the right for human sacrifice. It stole away the soul of Alvina. She felt transfigured in it, clairvoyant in another mystery of life. A savage hardness came into her heart. The gods who had demanded human sacrifice were quite right, immutably right. The fierce, savage gods who dipped their lips in blood, these were the true gods. (LG315)

冬の夕暮れ以上に見事なものは何もないであろう。時々アルヴァイナとパンクラチオはロバと一緒に遅く戻って来た。その時、太陽が沈んで凍り始めた険しい坂をロバは用心深く歩んだ。そして何度も何度も小川で尻込みした。黄色の夕闇が白い荒れた川床に下りて、雑木林と丘の下側は暗くなり、空では、ああ、近くの山々の雪が紺色の空を背景にしてバラ色に燃えていて殆ど耐えられないほどに美しかった。荒涼として冷たい谷間の壮麗な異教の黄昏が、人間を犠牲にする権利を知っていた古代の神々を感じさせる場所がどんなに美しいかは言語を絶していた。それはアルヴァイナの魂を奪った。彼女は変身して人生の新たなる神秘を見通せる能力を持ったかのように感じていた。荒々しい堅さが心に入って来た。人間の犠牲を要求した神々は全く正しかった。普遍的に正しかった。唇を血に浸した獐猛な荒々しい神々。これらは真の神々であった。

キリスト教の愛の神を批判するロレンスは、アルヴァイナの気持ちを借りて古代の野蛮な神々を絶賛している。生け贄を要求したからといってここで異教の神々を、現代人は批判できるであろうか。いや、できな

いであろう。キリスト教は「愛」の名の下に他国へ侵略し原住民の命を数知れなく奪ったのである。また第一次世界大戦においても「博愛」「正義」「自由」の名の下に多くの無実の人間に血を流させたのである。そしてこれは戦争に出かけたくない男性を無理に行かせたのである。一方ロレンスが、古代の神々を野蛮であるが「真の神々」と呼ぶ時、その神々は人間に自発的に身を捧げさせたのであり、強制したのではなかった。人間はその美しさに「魂を奪われた」のである。このように人間に「血を流させる」という観点から二種類の神々（キリスト教の神と異教の神々）を比較すると、ロレンスは異教の神々の方が「真の神々」であると考えている。それは異教神は偽善のない神々であるからである。しかしアルヴァイナは一度文明世界で教育を受けた人間であり、カリファーノを客観的に見ることができる。このような客観性を持ってその異教の場所を見る時、彼女がそこの美しさばかりではなく残酷さをも感じ取るのは止むを得ないことであろう。

しかしカリファーノは、日常生活は不便だが、自然の美しさという長所が短所を補って余りある場所なのである。しかし、戦争が近づいてきて、イタリアで宣戦布告がされるとチッチョは出征することになる。妊娠している彼女は、チッチョに是非戻ってくることを約束させる。これは未来のことなので、アルヴァイナの将来がどのようなようになるのかは未定であるが、チッチョの「戻ってくるよ」という言葉に二人の愛の結実がうかがえる。チッチョは戻ってきたらアメリカへ行こうとアルヴァイナに言っていることから、ロレンスはヨーロッパに執着してはではなくて、更に適切な環境を探し模索していると思われる。この小説の結末はオープンエンディングとなっている。チッチョが最終的にアメリカへ行こうと言っているのは、ロレンスはカリファーノが理想の場所であるとは考えていないことを示している。そこはイギリスよりも、またヨーロッパの文明国よりも望ましい場所であろうが、チッチョとアルヴァイ

ナつまりロレンスの代弁者たちは、更なる理想の地を求めて旅に出るのである。

以上に述べてきたように、アルヴァイナは生まれは上流階級でありレイディとして生まれたのであったが、その「道を外れて下層階級の男性と結婚し」、これによって自らの上流階級意識を失ったと考えられるので常識的には「墮落した」と言え（①の意味、）最後にはカリファーンへ行ってしまってイギリスから姿を「消して」しまったのである（②の意味）。また、中流階級のミッチェル医師とチッチョのどちらを夫に選ぶかを一時迷った（③の意味）が、チッチョに夢中になって（④の意味）、彼と一緒に旅回りをして（⑤の意味）彼を選んだのである。これら5つの行動はアルヴァイナが生きていた当時の社会常識では「墮落した」とことと考えられるのであるが、ロレンスは彼女の生き方を、彼女が「真の自己」を見出して生まれ変わるために必要であったこととして賞賛しているのである。そして彼女が結婚した男性チッチョは「黒い男性」であり、キリスト教文明とは異なった異教の官能的な世界を代表する男性である。ゆえにロレンスは、『アルヴァイナの墮落』という小説で、キリスト教の単一的な精神主義を基準とする西洋世界を批判しているのである。

注

- 1) Lawrence, David Herbert. *The Lost Girl*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1981). 以下、本書からの引用文の頁は引用の末尾に記す。
- 2) 拙訳書『アルヴァイナの墮落』（D・H・ロレンス著/山田晶子訳；近代文芸社、1997）。本論における当小説の訳の引用は、全て本書からによる。
- 3) Lawrence, David Herbert. *Women in Love*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1987), pp. 111-2.
- 4) Lawrence, David Herbert. *The Plumed Serpent*. (Cambridge: Cambridge

University Press, 1987), p.273及び p.311を参照のこと。

5) *Ibid.*, p.311.

6) Bell, Michael. *D. H. Lawrence: Language and being* (Cambridge: Cambridge University Press, 1992), pp.136-9.

7) Lawrence, David Herbert. *Sons and Lovers*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1992), p.183.